

なしのい縮病の発生実態について

1 試験のねらい

近年県内のなし園で、樹の中の1枝の葉がい縮して衰弱する症状がみられるようになった。このような症状は他県でも発生しており、なしのい縮病と呼ばれている。そこで、県内におけるい縮病の発生実態を明らかにするため、昭和56～58年に現地調査を行った。

2 試験方法

県内6地域の121園について、い縮病発生の有無、品種名、発病した時の樹令、高接ぎ、低接ぎの別を聞きとり調査した。なお、その時点で発病していた樹については症状を確認した。

3 試験結果及び考察

なしのい縮病が現在までに発生したことのある園は、表-1のように調査園全体の83%で、調査地域による差も少なくほとんどの園で発生していた。しかし、1園当たりの発生本数は2～3本と少なかった。品種別にみると栽培面積の多い幸水で発生が多く、次いで豊水、新水、長十郎であった。しかし、その他にも長寿、二十世紀、新高、祇園で発生した例がみられることから、特にい縮病と品種との関係はないと考えられた。

樹令との関係を見ると、発病した時の樹令が最も若いのは2年生（高接ぎ幸水）で、最も古いのは45年生（二十世紀）であった。新水、幸水及び豊水では5～10年生の比較的若木での発病が多く、長十郎やその他の品種では15年以上になって発病するものが多い傾向であった。また、高接ぎ更新の多い幸水と豊水についてみると、い縮病は高接ぎ、低接ぎに関係なく発生していた。

い縮病の症状は①果そう葉及び新しょう基部葉がよれるタイプ（写真-1）と、②主として新しょう葉に褐色の斑点を生じるタイプ（写真-2）の2種類に大別される。表-2のように、長十郎では①のタイプのものだけであったが、新水、幸水及び豊水では両方のタイプの症状が確認された。どのタイプでも最初、樹の中の1枝に発病し、それが徐々に他の枝に広がっていくことが

表-1 なしのい縮病の発生実態

調査地域	調査年次	調査園数	い縮病の発生		発生本数	1園当たり本数	品種別発生本数				
			園数	同比率%			幸水	豊水	新水	長十郎	その他
宇都宮	昭56	55	44	80	97	2.2	50	18	19	5	5
鹿沼	56	12	11	92	26	2.3	15	8	0	3	0
小山	57	10	7	70	20	2.9	7	1	0	7	5
芳賀	57	19	18	95	40	2.2	18	5	11	4	2
高根沢	58	17	14	82	23	1.6	14	4	1	4	0
湯津上	58	8	7	88	18	2.6	13	2	3	0	0
計		121	101	83	224	2.2	117	38	34	23	12

多く、①のタイプでは発病した枝を切って治ったという例が多く、②のタイプでは発病した枝を切っても他の枝に発病し、衰弱、枯死するものが多い。

い縮病の発生した枝の果実は、症状が進むと変形して肥大せず、症状が軽い場合はある程度肥大するが、②のタイプでは幸水、豊水とも収穫時には激しいみつ症状果になった。(写真-3)

以上のように、本県のなしのい縮病は、症状に2つのタイプがあり、1園当たりの発生本数は少ないが、広範囲に発生していることが確認された。

表-2 い縮病の症状と品種別の発生本数

症状の タイプ	品種別発生本数 本				
	幸水	新水	豊水	長十郎	長寿
①	10	2	3	7	1
②	17	2	1	0	0

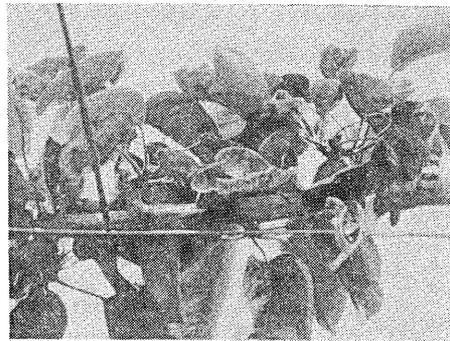


写真-1 ①のタイプの症状(果そう葉がよれる)幸水

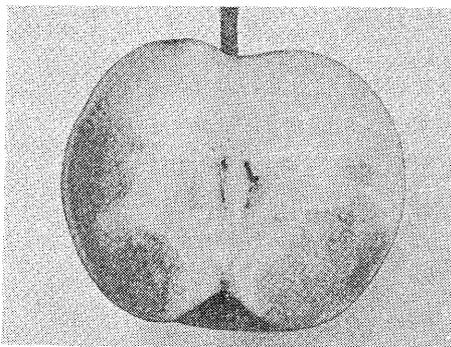


写真-3 果実のみつ症状(②のタイプのもの)幸水



写真-2 ②のタイプの症状(新しょう葉に斑点を生じる)幸水

4 成果の要約

なしのい縮病は県内のなし栽培地域に広く発生しており、果そう葉がよれるタイプと、新しょう葉に褐色の斑点を生じるタイプの2つの症状が認められた。い縮病は品種に関係なく発生し、新水、幸水及び豊水では高接ぎ、低接ぎにかかわらず、5~10年生の若木での発病が多かった。

(担当者 果樹部 金子友昭)